

立命館大学アート・リサーチセンター
 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」
 2018年度 共同研究成果報告書〔研究費配分型〕

2019年 4 月 19 日 提出

1. 研究課題名	
京都を起点とした染色技術及びデザインのグローバルな展開に関する研究 (英文標記: Research of Kyoto-based Global Development of Printing Techniques and Designs)	
2. 研究代表者	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
加茂瑞穂(かもみずほ)	京都工芸繊維大学・JSPS 特別研究員
3. 研究分担者 (合計: 6 名) ※アート・リサーチセンター所属者は、「ARC 所属教員欄」に○印を付してください	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
並木誠士(なみきせいし)	京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科・教授、 同大美術工芸資料館・館長
青木美保子(あおきみほこ)	京都女子大学・教授
鈴木桂子(すずきけいこ)	衣笠総合研究機構・教授
上田文(うへだあや)	関西学院大学・非常勤講師、同志社女子大学・非常勤講師
杉浦未樹(すぎうらみき)	法政大学・教授
山本真紗子(やまもとまさこ)	立命館大学文学部・先端総合学術研究科授業担当講師

4. 研究課題の概要
<p>これまでの研究課題「デジタル・アーカイブ手法を用いた近代染織資料の整理と活用」と、それに関係した研究プロジェクトにより、学術資料として俎上に上がっていない近代染織史に関連する資料の整理・蓄積が進み、それによって、伝統的地場産業と位置付けられてきた京都の染織のグローバルな展開—近代以降の西洋技術・デザインの導入だけではなく、戦前から始まるアジア・アフリカへの製品輸出・海外事業展開も含む—が明らかになってきた。</p> <p>そこで、研究課題の新しい段階として、近代京都を起点として染色産業がどのように国内外へ展開されてきたのか、あるいは影響を受けてきたのかを染色技術やデザインを通じて明らかにする。具体的には、京都の近代染織、アフリカンプリント、伊勢型紙、バティック等をデジタル・アーカイブ化することにより可視化し、デザイン・技術の世界的連環を解明する。</p>
5. 研究成果の概要
<p>1. 染織資料のデータベース化 大同マルタ会旧所蔵資料のデータベースを立ち上げ、バイリンガル化も進め、公開の調整段階に入った。</p> <p>2. 展覧会の開催</p>

展覧会「掌のなかの図案—近代京都と染織図案 II」を京都工芸繊維大学美術工芸資料館において開催した。

3. 染織研究者のネットワーク構築

・シンポジウム「Printed Textiles for West Africa. c1860-1980s」「Roundtable History & Design, Kosode & Banyans: Contested World Views in an Attire c1580-1910」がヨーロッパで開催され、本共同研究のメンバーが各シンポジウムで発表をおこなった。

・浜松市博物館・静岡文化芸術大学関係者らと研究交流を進め、展覧会「浜松の染色の型紙-機械染色の型紙を中心として-」に協力した。また、関連シンポジウムでは共同研究メンバーが講演をおこなった。

4. 染織従業者らへの聞き取り調査と聞き取り記録のデジタル・アーカイブ

・アフリカンプリントに関する聞き取り調査を計4回行い、2018年度は新たに調査先が加わった。

・「マドレー染」と呼ばれる昭和期に途絶えた染色技法を復活させ、ドレスを制作し、そのドレスをもとにして高島屋新作ゆかたとして販売した。

・機械捺染のロールを彫刻するために使用された「ポンチングマシン」が奇跡的に稼働した。当時の様子を知る職人の方に協力を仰ぎ、彫刻の様子を再現する動画を記録・作成した。

上記の活動を通じ、研究者のみならず社会にもむけても研究成果発信をおこなった。